

第4回委員会の論点について

委員の皆様からのご意見

ポイント設計

①歩数に応じたポイント付与のインセンティブ設計

- ・目標達成意欲を高めるため、「1週間毎日」という高い目標だけでなく週 5日達成など段階的なボーナスを設定し、継続のハードルを下げるべき。

②ポイント交換単位、有効期限

- ・少しのポイントでも、何かしら利用 できるような仕組みを考えたほうがよい。
- ・年度ごとの失効ではなく複数年ためられる ようにすれば、長期的な目標となり得る。

③活動が困難な方への配慮

- ・歩くことが難しい方々もポイントを獲得できるような仕組み など、ポイントの格差を生まないということも考えなければいけない。

委員意見を踏まえた対応案・今後の方向性

①歩数に応じたポイント付与のインセンティブ設計

- ・1週間における「1日の歩数4,000歩以上」の達成日数(4~7日)に応じて、段階的なインセンティブを設定する。

②ポイント交換単位

- ・ポイントの交換単位を 100ポイント単位とする。
- ・ポイントの有効期限は、ポイントを獲得した年度の翌年度末とする。

③活動が困難な方への配慮

- ・歩くことだけでなく、日々の体調管理、イベント参加による人との交流、健康動画の視聴など、一人ひとりの状態やライフスタイルに合わせて楽しめる多彩なメニューを用意する。

アプリ機能

①注意喚起

- ・冬期間、つるつる路面を怖がって外に出なくなる。冬だけでも「つるつる指数」をアプリに表示すると、指数が低いと冬でも出歩こうかとなるのではないか。

②アプリの継続利用を促す工夫

- ・継続が非常に重要。時間とともにアプリを開く人が減ってくる。利用者が飽きないようチャレンジやキャンペーンの要素が楽しさにつながる。
- ・ポータルサイトがあるといい。区別などの登録者数がリアルタイムで見えると、うちの町内会でもやろうということも出てくるかもしれない。
- ・ゲーミフィケーション、楽しくできることが重要。ランキングはモチベーションにもつながったり、みんなで協力して取り組む意欲につながる。

③アプリの拡張性

- ・来年4月より少し中期的に見て、このアプリで完結するより、脳トレのようないろいろなものと連携できる可能性を残したアプリのほうが将来的な発展性も高い。
- ・スマートウォッチや体組成計のアプリで健康情報が取れるようになっているので、将来的にアプリが連動しながらデータが自動的に記録されていくといい。

①注意喚起

- ・札幌市内での冬季歩道路面の滑りやすさを3段階で予測する「つるつる指数」が最も滑りやすい指数3の日をアプリのお知らせ機能で周知する。
- ・将来的に、感染症予防や熱中症アラートなど、市民の外出や行動判断に役立つ情報の提供も検討する。

②アプリの継続利用を促す工夫

- ・目標達成に応じたポップアップ、ゲーミフィケーションを意識したランキング表示などを検討
- ・活動の活性化や習慣化を促す各種キャンペーンを検討する。
- ・ホームページ等で、アプリの普及状況や市民の活動状況等を公表する。
- ・グループ機能は、複数のグループに登録可能とすることを検討する。
- ・利用者が楽しめる仕組みは、アプリリリース後も引き続き検討する。

③アプリの拡張性

- ・多様なサービスとの連携を引き続き検討し、健康アプリがより多くの市民の生活を支えていけるよう発展させていく。
- ・デジタル技術の発展や普及状況を見据えながらシステムの拡張を検討するとともに、有識者の協力を得て情報を分析し、より良い市民サービスに生かす。

いただいた意見

様々な活動との連携

- ・民間企業に限らず、市内の大学で市と協定を結んでいる大学のイベントなどともアプリが連携できるといい。
- ・例えば子ども食堂での活動など 様々なボランティアの活動にもポイントを付与し、歩くことや、人と会う取り組みをさらに拡げていけるとよい。
- ・健康ポイントの仕組みを、将来的には様々な社会貢献活動を評価するようなものへ発展させられるかもしれない。
- ・アプリの利用を促すうえで、かかりつけ医や調剤薬局の薬剤師などが 利用者に声をかけ、活動を褒めるなど、専門家による後押しが極めて有効。

人とのつながり

- ・外出が少ない人の孤立を防ぐため、家族などとの近接を Bluetoothで検知し、「人と会う」活動としてポイントが付与するアイデアも考えられる。
- ・制限が必要かもしれませんが、簡単な人とのつながりでも何かしらポイントが入る機能があるとさらによい。
- ・ほかのアプリでも誰かを誘えばポイントがつくというものがあり、誰かを誘ったら何ポイントつくということもできるのでは。

データ活用

- ・アプリで得られるデータを個人情報に十分配慮したうえで、コーホートの分析や歩数など、いろいろなバイタルのデータを市民や企業がうまく活用できるようになるといい。
- ・体温を入れて、どの区で発熱している人が多いというものがマップ上で見ると、医療機関と連携をして、今どういう患者さんが増えているのか、市としての感染症対策にも使える可能性もある。

セキュリティ

- ・スマートフォンアプリによるサービス提供において、確実な本人確認の仕組みが課題

委員意見を踏まえた対応案・今後の方向性

- ・大学をはじめ、各種の市民公開講座や健康関連イベントの主催者に対して、事業周知を図り、多くのイベントが登録されるよう協力を依頼する。
- ・健康アプリが各種ボランティア活動や地域イベントへの参加など、市民の多様な社会参加のきっかけとなるよう、様々な活動を取り入れていく。
- ・利用者が様々な場面でアプリの情報を有効活用できるよう、積極的に広報を重ね、関係団体に対しても広く制度周知を図る。

- ・家族などアプリ利用者同士が一定距離内にいることで「人とのつながり」ポイントが付与される機能を実装可能か検討する。
- ・アプリの利用者を増やすため、既存ユーザーが新規ユーザーを紹介した場合にポイントが付与される仕組みを検討する。

- ・アプリで得られる情報について、個人情報保護を徹底した上で研究機関等が活用したり、幅広く市民生活に役立てられるよう、公表等の取り扱いを検討する。
- ・アプリに登録される体温データ等を匿名化した上で集約し、地域ごとの発熱状況等を可視化する取り組みを検討する。

- ・個人情報の漏洩リスクのない仕組みを構築し、セキュリティに万全を期すとともに、利用規約に不正利用に関する罰則規定を明記し、周知を徹底する。
- ・様々な個人認証技術の発展、普及状況も踏まえながら、実現可能な方策を検討していく。